

出題分析			
試験時間	120分	配点	学部により異なる
		大問数	3題
分量（昨年比較）	[減少 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>例年通り各大問とも400字以内、3題の出題。時代範囲はⅠが古代・中世で、Ⅱ・Ⅲはともに近代であったが、本年度から出題範囲に歴史総合が含まれるようになったことをふまえて、Ⅲは世界史との共通問題であった。設問の内容は政治・外交・社会史で純粋な経済史は出題されなかったと言える。Ⅱは短答記述・論述ともに教科書範囲の学習で解答しやすいものも多かったが、Ⅰには難度の高い設問が見られ、Ⅲも問1の短答記述のほか、問2では委任統治や民族自決に対する理解が求められるなど、日本史選択者にとってのハードルは小さくなかった。難易度は、総じて昨年度に比して同程度と言えるだろう。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	古代・中世の災害	古代～中世の災害について記した史料をもとに、主に社会史が問われた。問2は土地制度の典型的な問題であるが、「A～Cの内容をふまえ」るのは難。問4は史料の情報も少なく答えにくい。問5も、御成敗式目を寛喜の飢饉時の「徳政」とする見方を知る受験生は少ないと思われるうえ、指定語句も記述の方向性をリードするようなものではなかったため、どのようにまとめるか悩んだだろう。	やや難
II	近代の対ロシア関係史	日露関係を概観した史料をもとに、幕末から明治時代中期の日露関係のトピックが問われた。問1は日露和親条約についての設問。なお、日露和親条約の正式名称は日露通好条約であった。問3は、大津事件の名称と当時の条約改正交渉との関連を問う問題。ここでは前提となったロシア・イギリス間の対立と、事件によってそれまでの条約改正交渉が止まったことを書けばよい。問4は、三国干渉の経緯と、それが日露関係に及ぼした影響を述べる。終期が難しく、「直接的に」の条件から北清事変や日露戦争には触れるべきでないか。	標準

設問別講評			
III	韓国併合と委任統治	外務官僚の回顧録をもとに、近代の韓国併合や委任統治について問われた。問1の「オーストリア＝ハンガリー帝国」は、日本史選択者は歴史総合でしか学ばず、難しかったと思われる。問2の論述のうち、前半の韓国併合の過程は日本史選択者にとって典型的な設問であるが、「併合」の語が用いられた意味を史料からくみ取るのは容易でないだろう。また、後半の委任統治は日本史の論題としてはなじみの薄いテーマである。委任統治が国際連盟からの委任であることは知っているであろうが、民族自決の理念について想起する必要があった。	やや難

合格のための学習法

一橋大学の日本史は、短答記述問題と論述問題を合わせて記述量が400字3題と非常に多い。しかも設問ごとには字数が設定されておらず、自分で配分しなければならないので、その点からも難しいのだが、時に細かな内容を問う問題も出題され、総じて難しい。基本的な学習法は、まず教科書に書かれていることをしっかりと身につけ、これを自分の言葉で説明することができるかが合格の鍵となる。一橋大学は経済史と社会史の比重が非常に大きく、教科書では経済の動きが世紀単位などで整理されていないことが多いため、教科書以外に用語集や資料集などを利用して歴史用語の内容をしっかりと理解し、日本史と関わる政治経済分野についての丁寧な学習も必要である。また、今年度からは出題範囲に歴史総合が加わったため、近現代の世界史分野にも広く目配りしよう。教科書に登場する人物名などは確実に得点するため、正しく書けるように対策しておきたい。論述問題は、教科書の知識だけでは足りない出題が多いので、用語集も活用するとよい。なお、現代の時事問題と関連するテーマが出題されることもあるため、政治や経済のニュースに関心をもつことも有用である。近年は過去問から類題が出されることも増えているので、過去問演習もしっかり進めよう。